

高田宏

荒ぶる自然

日本列島
天変地異録

新潮社

高田宏

日本列島
変地異録

蘇工業学院图书馆
藏書章

新潮社

荒ぶる自然

——日本列島天変地異録

一九九七年二月一五日発行

著者 高田 宏

発行者 佐藤隆信

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話 (編集部) 03—3266—5411

(読者係) 03—3266—5111

振替 〇〇—四〇—五—八〇八

印刷所 錦明印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

© Hiroshi Takada 1997,
Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

価格はカバーに表示してあります。

ISBN4-10-329511-2 C0095

荒ぶる自然 ◆ 目次

はじめに

6

福井地震

9

昭和二十三年。戦後が始まったばかりの夏、町は再び崩れ落ちた。それまでの上限「6」を改めさせた「震度7」の衝撃。

浅間山天明大噴火

29

天明三年、大噴火で溢れ出た熔岩は「鬼押し出し」と呼ばれる草木一本ない奇怪な岩石原を作った。それから二〇〇年、今、再び緑が。

伊勢湾台風

49

昭和三十四年。瞬間最大風速六〇メートルを超える大型の台風十五号は、満潮にぶつかった沿岸地帯に上陸、水は家々を流し人びとを飲み込んだ。

天竜川三六災害

69

昭和三十六年。大雨の続いた天竜川流域で大洪水が発生したことの最大原因は、発電用に建設されたダムだった。ダムによる河床上昇が川本来の力を衰えさせていた。

有珠山噴火

89

昭和五十二年。北海道の有珠山は火と煙を噴き上げたが、死者はゼロだった。降りしきる噴石の下、住民をまとめあげた一人の町長がいた。

狩野川台風

109

昭和三十三年、伊豆。狩野川台風が引き金となり下流域を襲った鉄砲水は、流木などが堆積しダム堰堤と化した修善寺橋の決壊が原因だった。

三八豪雪

129

雪そのものが災害となる例は実は少ない。昭和三十八年の大寒波は、成長途上にあつた社会機能を麻痺させた。雪と人の暮らしの物語。

伊豆大島噴火

165

昭和六十一年。一万人の島民が島から脱出し、一ヶ月に及ぶ避難生活が始まった。帰りたい——それが火山と共に暮らしてきた島の人々の願い。

三陸沿岸大津波

185

明治の半ば、津波によって住民二千名の九割以上を失った岩手県の田老村は昭和八年津波で再び九百名を失って以来、大防災計画を進めてきた。

桜島大正噴火

205

「桜島には異変なし」鹿児島測候所の観測が悲劇を招く。大正三年、桜島の大噴火は八集落を全滅させ、一四〇名の死傷者を出した。

室戸台風

225

死者三千人・昭和九年の台風、死者二百人・昭和三十六年、第二台風。二つの室戸台風が被害の明暗を分けたのはなぜか。

下北ヤマセ冷害

245

平成五年夏、北東北を襲ったつめたい偏東風（ヤマセ）。作況指数ゼロ、コメ不足に都会の者は慌てたが、なぜか下北に恐慌はなかった。

あとがき

264

荒ぶる自然

——日本列島天変地異録

はじめに

北米大陸を東から西へおよそ三八〇〇キロ、バスに乗っていたことがある。大西洋沿岸のボストンでバスに乗り込み、オンタリオ湖、エリー湖、ミシガン湖の南岸を通って、やがて大陸中部にひろがる大平原を横切り、ロッキーマウンテン東麓のソルトレイクシティまで、まる三日間のバス旅行だった。

途中あきれたのが大平原だ。行けども行けども何もない。前後左右まったく広がっている大地が朝も昼も夜もつづいていた。朝見ていた風景と寸分違わない風景が夕方の風景だ。時間がほんとうに経ったのかどうか怪しくなるほどだった。三六〇度地平線の見える平らな風景をぼくはあきれながら眺めていた。丘すら見えない平地の広がりには、単調きまりないものだった。翌日ようやく赤茶けたテーブルマウンテン群が視界に入りだしたときには、その不毛の大地でも景色に起伏のあることで、なにかほっとしたものだ。

日本列島にはない風景だった。空虚な世界だった。見ていて心が虚しくなる。

あの平らな大地も一つの自然には違いない。しかし、日本列島の自然とは似ても似つかない単調で空虚で瘦せた自然だ。

日本列島には無数の山がある。山々の大半は、ごく高い山の山頂近くを除いたら、草木に覆われている。その山々に降る雨が森の土にたくわえられ、ゆっくりと谷へ流れて川になっている。川の数も多い。数え方次第だが数万本の川が日本列島の山々から流れ出ている。

複雑な自然だ。変化に富む豊かな自然である。その恩恵を受けて、ぼくたちの祖先もぼくたちも生きてきた。

だが、この自然はまた「荒ぶる自然」でもある。山が生みだして川が運んでくれる水は生きるのに欠かせない自然の恵みだが、この水はときに洪水となって走り、岸辺をえぐり川筋から溢れて田畑や家々を飲み込む。

日本列島がもしも北米大陸のあの大平原のように平らな大地だったら、そんなことは起こらない。山がなければ川がないから、洪水の起こりようがない。

日本列島は山岳列島である。火山列島でもある。それゆえに森林列島であり河川列島である。日本列島を旅するとき風景は刻々変化する。大きくは南北の変化も東西の変化もあるが、ほんの峠ひとつ越え岬ひとつまわっただけでも別の風景に出会う。複雑な大地が複雑な気候と共に、千変万化する風景をこの列島に生み出してきた。それが、日本列島の自然の豊かさだ。そして、その自然がぼくたちを生かし、ぼくたちの心を養ってきた。

平らな大地とちがつて複雑な大地は動きやすい。山崩れもあれば地震もある。平地の雪は決してなだれることはないが、山の斜面の雪は雪崩を引き起こすことがある。火山は大地をあたためてくれたり温泉を与えてくれたりする一方で、時々噴火して熔岩を流したり火山灰を降らせたりする。火山活動にともなう地震もある。日本列島と周辺海底の複雑な構造がしばしば大地震を起こし、海の地震が津波となって海岸を襲うこともある。

豊かな自然は動く自然だ。動きが大きいとき、自然の力がぼくたちにとって恐ろしいものとなる。ほくも福井地震に直撃された日々の恐怖を半世紀後のいまでも忘れていないし、狩野川台風や伊勢湾台風の災害地を取材したときの悲惨は目に焼きついている。

だが、それなら動かない自然がいいかと聞かれたら、それは嫌だと思う。山がなく、森がなく、川がなく、ただ静かで平らかな大地がひろがるだけのところには、ほくは暮らしたくない。

日本列島の荒ぶる自然がこれまで多くの人の生命を奪ってきた。家々を壊し、田畑を荒らしてもきた。たくさん悲しみを生んできた。それは辛いことだ。だが、その辛さがぼくたち日本列島に生きる者を鍛えてもきた。地震、噴火、台風、水害、雪崩、津波といった荒ぶる自然の歴史は、その自然に鍛えられてきた人間の歴史をも見せている。荒ぶる自然はしばしば美しい人間の母胎であった。

福井地震



地震発生から四十七年後、
震源地に立って足がふるえた。

I

その年の春、新制高校が発足した。通う校舎は以前と同じだったが、高等学校一年生になったぼくは、ころもち胸を張って生きていた。金沢の四高などの旧制高校に比べたら新制高校は格が下がるとは思いますが、ともあれ高等学校生徒になったのだった。

高校生になって約三ヶ月、中学生のときには歯の立ちそうになかった本なども読み留っていた。食糧難がつづいていて毎日空腹だったけれども、目は高く青空へ向けていた。何かいいことがありそうな日々だった。

突然、その日々が中断され、巨大な亀裂が走った。大地震に見舞われたのだった。

地震の夜、ぼくは傾いた家から取り出してきた日記帳に鉛筆で、地震発生からの記録を書きつけていた。月明かりがあつたのだろうか、くらがりのなかで半ば手さぐりに、字を書きつづけた。裏の空地に立っていた大きな桐の木の下での野宿だった。空地をとりかこんでいる四軒ばかり

の家の人たちが、桐の木の根もとで夜を明かした。大きな余震がくりかえし襲っていた。そのため危くて、なかなか家のなかへ物を取り入れなかった。多くの日記帳も、余震の間をねらって薬箱を取りに駆け込んだとき、ついでに驚づかみにしてきたものだった。二日目の晩からは蚊帳を木の枝に吊って寝たが、最初の晩はそれも出来なかった。

昭和二十三年（一九四八年）六月二十八日分の日記のページはすぐに埋まってしまった。その晩のうちに九月か十月のページまで書きつぶし、翌晩か翌々晩には十二月三十一日のページまで使い切った。

あの日記帳は消えてしまった。二十歳になったとき、二十歳以前の自分と訣別する気になって日記とか読書ノートとか、いろんなものを燃やしたのだが、その火のなかへあの日記帳も投げ込んだのだ。

惜しいことをした。残しておけばよかった。長らくそう思っていた。だが、このごろは少し気持ちが変わっている。惜しい気持ちもないではないが、それはやはり感傷に過ぎないだろうという気になっている。あの日記にどれだけ詳しく地震体験が記されていても、所詮は十六歳の目しか働いていないだろう。それに「事実」などは、同じものを見ていても記す人によって様々に変わるものだ。自分が窓から目撃した事件が第三者の報告では全く別のものになっているのを見て、歴史著述を放棄した学者がいた。そんなものだろうと思う。まして大地震のような混乱のなかでは、あいまいな無数の事実が、刻々変色しながら、飛び散り、漂い、無秩序に降りつもってゆく。

福井地震、または福井大地震と、後年呼ばれるようになった地震だった。当時は北陸大震災という呼び方もあったが、被害、ことに死者の大半が福井県北部に集中していたことと、震源が福井県北部の内陸地下であったために、福井地震という名称に落ちついている。

地震の概要を、『地震の事典』（三省堂、萩原尊禮監修）から引いておく。

●福井地震 一九四八（昭和二十三）年六月二十八日に福井平野に発生した。震央は、北緯三六・一度、東経一三六・二度で、M七・一だった。被害は福井平野とその付近にかざられたが、死者三八九五人、家屋の倒壊三万五四二〇戸、半壊一万一四四九戸、焼失三六九一戸に達した。（以下略）

死者三八九五人という数が正確かどうかは分からない。戦後まだ三年という混沌の時代だったからだろうが、ほかにいくつもの違った死者数がある。

阪神大震災（一九九五年）の報道にあたって、新聞が四十七年前の福井地震を引き合いに出していた。その各紙の福井地震死者数が次のようにはらばらである。

毎日新聞（1・19夕刊）

三七六九人

々

（1・20朝刊11面）

三八九五人

日本経済新聞（1・19夕刊）

約三七〇〇人

朝日新聞（1・20朝刊）

三八四八人

読売新聞（1・27朝刊）

三八九五人

気づいたものだけを挙げたのだが、ほかにも違った死者数があるかも知れない。右のうち二つは『地震の事典』と同じ三八九五人、朝日新聞は消防庁のデータに基いているとのことで三八四八人、毎日新聞の三七六九人のほうは岩波書店刊『近代日本総合年表（第二版）』と同じ数字である。

ともあれ、多い数と少ない数で約二〇〇人の死者数の差がある。新潟地震（一九六四年）の死者が二六人、日本海中部地震（一九八三年）の死者が九九人であることを思えば、二〇〇人は大きな数だ。奥尻島の地震と津波による死者・行方不明者の数と同じくらいの人数が、あいまいなままになっている。

ほかが福井地震に遭った場所は、石川県南端の大聖寺町である。のちに近隣の町村と合併して現在は加賀市になっている。この加賀市の刊行物でも、二つの死者数がある。

『加賀市の歴史』では、市内の死者三四人、『こども加賀市史』では死者三九人、行方不明七人となっている。行方不明者のなかには、多くの親友のお母さんが含まれているのだろうと思う。大きな山崩れの下になって、掘り出すことができなかった。

統計表をのせている『こども加賀市史』によると、多くの住んでいた大聖寺町の死者は一五人、行方不明一人、全壊家屋一七〇、半壊家屋三〇〇〇となっている。人口約一万四千人の町だったから、ほとんどの家が半壊かそれ以上だったことになる。

多くの家も半壊だった。学校も半壊で、あとで傾いた校舎を起こし、大きな長い角材を何本も支えにした。三年後に卒業したときも校舎には斜めの支え材が行列したままだった。